

栗林輝夫先生を偲んで

元キリスト教と文化研究センター教授 樋口 進

わたしが2005年4月に関西学院大学キリスト教と文化研究センターに教授として奉職したとき、職務上センター副長に任じられましたが、そのときのセンター長が栗林先生でした。以後、主にこのセンターでの仕事を通して、先生とは親しくさせていただきました。それまでは、先生のことはお名前では存じていましたが、直接お目にかかったことはありませんでした。しかし、先生の著書のいくつかは読んでいましたので、ひそかに敬意を抱いていました。特に『荊冠の神学』を読み、差別された人や弱者の立場に立って、権力者を痛烈に批判され、旧約の預言者のような人という印象を持っていました。しかし、関西学院で初めてお目にかかったときは、温厚でユーモアのあるお人柄で、また飄々とした語り口は人をほっとさせるという一面があり、とても好感が持てました。しかし、思想的には権力批判的で筋の通った厳しい一面がありました。

キリスト教と文化研究センターでは、先生はセンター長として、いろいろな企画を指導されました。特に「平和」をテーマにして、数々のフォーラムや講演会を提案され、実行されました。2005年のフォーラムでは国際基督教大学の最上俊樹教授を迎えて「敵意の中垣を超えて——国連体制にかけるもの——」という講演を先生の指導の下に企画・実行することができました。また、2006年のフォーラムでは四国学院大学の山崎和明教授を迎えて「ディートリヒ・ボンヘッファーの平和思想」という講演を、また、韓国アジア教育研究院の呉在植（オー・ジェシク）院長による「東北アジアの平和建設と日本の役割」という講演を、また、前キリスト教と文化研究センター教授の前島宗甫先生による「平

和を創る——あるNGOの軌跡から——」という講演を先生の指導の下に企画・実行することができました。また、2007年には、大阪女学院大学の奥本京子准教授を迎えて「思考停止をやめる！——紛争転換と非暴力で平和を創ろう——」という講演会を、また、関西学院大学文学部の大橋毅彦教授による「上海から平和を考える」という講演会をやはり先生の指導の下に企画・実行することができました。

そして、この「平和」という企画は、『キリスト教平和学事典』の発行で総決算となりましたが、これの計画・実行も栗林先生の指導の下で進められました。そこで、先生は、この事典の方針として、ノルウェーの政治学者ヨハン・ガルトウングの提唱に基づいて、「平和」を単に戦争のない「消極的平和」を超えて、貧困や抑圧、差別といった構造的暴力の止揚を目指す「積極的平和」を主張され、項目をこの方針に従って選定されました。この事典の「まえがき」は栗林先生が書かれましたが、ここに先生の「平和」への思いが結集されていると思います。次のようにあります。「21世紀に入り、日本の国内には『いじめ』や経済格差、被差別部落・在日韓国朝鮮人・アイヌなどへの少数者差別、外国人労働者や性的少数者への不寛容と偏見など、『平和』が実現されているとはいいがたい現状があります。また新たにアメリカを震源とした経済不況の波で、『派遣切り』などの厳しい労働事情も生まれています。他方、国際社会に目を転じて、紛争が絶え間なく起こり、イスラーム、ユダヤ教、キリスト教、またヒンドゥー教などの宗教間紛争や、多極化する世界を反映して『文明の衝突』（ハンチントン）の様相さえ論じられるようになってきました。個人の生の領域でも自殺、尊厳死、老いをめぐる諸問題など、『全人的』（ホーリスティック）な平和を得ることが、今日いかに困難であるかを明らかにしています。私たちを取り巻く環境世界が多くの紛争によって複雑化している、こうした現実を省みると、問題のありかを指摘し、それに宗教倫理的な指針を提供することは現代に不可欠な要件と言えましょう。」ここに栗林先生の「平和」への思いが凝縮されているように思います。そして、この事典は、栗林先生の指導の下、キリスト教と文化研究センターの構成員を中心として多くの方々の協力を得て、2009年に教文館より無

事出版することができ、「キリスト教の視点から平和の諸問題に取り組んだ日本初の事典」として評価されました。

また、わたしは個人的に、栗林先生が関係しておられた四国学院大学の評議員を先生から依頼され、2006年から年3回行われる評議員会にて先生と親しく接することができたことは楽しい思い出です。

先生は、ご専門の組織神学の分野では、日本の神学界を牽引する指導者でありましたが、『現代神学の最前線』（新教出版社）からは、わたしも大きな刺激を受けました。ますます右傾化し、平和から遠ざかりつつある現状において、先生の残された遺志を受け継ぐことの重要性を改めて思います。